〈特集「比較思想は現代に何を貢献しうるか」2〉

比較思想の現代的役割

――産業社会に生きる社会人の立場から――

清水良衛

はじめに

比較思想学会の会員受入れには閉鎖性がなく、向学の志ある人なら誰でも研究例会に参加でき、発表の場まで与えてくださるその在り方と、人や学問との出会いの中で、私は数多くのことを学ばせていただいてきた。それは学問の世界というものが真摯で際限なく深く広く、しかも厳密な世界であることを識ることにもなる場であったが、私にはそれ以上に大きな収獲があった。それはここに集まる会員の皆様方の多くが何らかの形で哲学と宗教という精神生活に密接した分野の学問に取り組んでおられることからの当然の帰結であったかもしれないが、そこでの出会いにそのつど学ばせていただいた人生への取組みや姿勢という、生き方そのもののお姿であった。学問は知識を量で計ることにその第一義があるのではなく、それが人生にどう反映し、そのことでこれが後続の若い人々の人生にどのように影響していくか、との視点でも眺めるとき、そこにある学問と人生の関係はソクラテス、孔子、釈尊、イエスといった歴史上の人物がおのおのにその人生で示してこられた姿とダブルイメージになって、私の上にかぶさってくる。対面教育というダイアローグの、今はなかなかにその場を持ち得ないそのことが、人生にとりいかに大きなものであるかを、くり返し体験させられてきた二十年であった。

(1)

「比較思想は現代に何を貢献しうるか」との問いかけは、これを「私における比較思想の現代的役割」と解して受け止めるとき、それは第一回大会に私が参加させて頂いて以来の、本学会への、言

わば期待と現実に触れての感想を述べることにもなろうかと思う。

比較思想学会との出会いを私が得たそもそもの契機は、昭和四九年二月一八日付毎日新聞に寄稿された峰島旭雄教授（早稲田大学）の一文であり、すべてはここから始まったのである。「比較思想」という言葉に接したのもこの時が初めてであった。

その比較思想という視点あるいは学問領域に、私が関心を深めていった背景が私には確かにあった、と思う。学生時代、地域社会で同時にボーイスカウトの隊長も引き受けていた私は、夏休みになると、近所の男の子を集めてできているこの隊の隊員と共にキャンプに出たり、奉仕活動に出たりしたものだった。ボーイスカウトの活動であるスカウティングでは信仰心をもつ、祈りの心をもつ、ということを大切にしており、わが国では神社とかお寺を中心に、あるいはキリスト教会を中心に構成された隊が幾つもあり、おのおのに活動をしているが、別に宗教運動をしているわけではない。私は法学部の学生であったが、スカウティングの傍ら、在家仏教会の講演を伺いに出たり、参禅会やバイブルクラスにも出る機会があった。いずれも個人的関心からである。

政府交換留学生試験に受かり卒業後、国立フィリピン大学に招かれ、一年半ここで勉強することになるが、ここはカソリックの国である。留学から帰ってアラビア石油に入社すると、今度はペルシャ湾の石油開発現場に行くことになったが、この辺りはイスラムの世界である。私は学生時代から卒業、留学そして就職後の駐在を含め、言わば大学に残った方々の大学院時代に相当する期間を、仏教、キリスト教、イスラム教という異なる文化圏を巡りながら、知らぬ間に比較思想的な生活をしていたわけで、そのような経過の中で私は、異なる地域でおのおのにその文化を成り立たせているものの背後に潜む思想とか考え方というものへの関心を、自然と深めていったのであった。

昭和三五年夏、一九六〇年八月のことだが、アラビアでの初めての異文化体験は、そこがカイロのような大都市でなく砂漠的風土がそのままの世界であっただけに、大変に強烈であった。

初めてクウェイトの飛行場で出会ったヴェール姿の婦人から受けた印象が、いまだに忘れられない。イスラムの世界で婦人たちがヴェールを覆っているのは羽田を発つ前から知っていたことなのに、なぜ改めて大きなショックを受けたのか。私はその姿に「これでは自分の全人生を否定されているに等しい。人前に顔が出せないということは、生きていることの人格的存在とその意味を社会が認めてないということだ」と思ったのである。

しかし年間を通してこの国（私の場合はサウディアラビアとクウェイトの両国）にいると、それも日常的な現象となり、当たり前のことになってくる。そして気づいたのは、ヴェールには顔をかくすというよりも陽の光を避ける機能があり、この砂漠の地では遥か昔からサングラスの役割を果たしていて、目を保護し砂嵐の日には防塵防砂にも役立ってきたのだという現実であった。こ

れを人格否定の風習と速断し、仮にこのヴェールを取り去ったら、彼女らは強い太陽光にサングラスもないまま眼を傷め、肌もヒリヒリと焼いてしまったことだろう。摂氏五〇度に近い直射光の下で、いくら「北風と太陽」をアラブ人に話しても、砂漠の太陽が慈母に見えることはないのである。アラビア語では太陽をシャムス（shams）というが、日本人が一般に抱くイメージのままにこの言葉を使ったら、英語の Sun を用いても、その生活感覚の中には大きな違いが生じることもありうるのである。

ある時、事務所で屋根から雨水が漏れ出す事故があった。雨などほとんど降ることのない世界であるから、雨が降ると日本人にはなつかしく、私も外に飛び出してしまった経験がある。しかし雨漏りには困り、アラブ人の業者を呼んで工事の不備を指摘した。すると業者は契約書を示し、この中の何処に雨漏りしない屋根を作ると書いてあるか、と言うのである。しかしこれはアラブ人の言い訳ではない。砂漠での屋根サクフ（saqf）は雨漏りを防ぐことよりも、第一義的には蔭をつくるものだった。このように価値観の違う世界で「日本」を伝えるということには、私たちの「アラブ」理解同様、常に限界があるわけで、このようなことから、私には私なりの動機で、本学会で学びたいとする関心があったのである。

(2)

当時はいまだ高度経済成長期の入口であり、日本の社会は急速に変貌を遂げつつも海外からの関心はまだ低く、しかも日本の側から海外に学ぼうとする伝統的な舶来崇拝の意識は盛んであった。事実、海外には当時、日本にない高度の生産技術やシステムがあり、日本人はこれをデミング賞の制度に見るごとく日本的に消化吸収していったのであった。日本人が海外の文物に大きな興味と関心を寄せるのは遣隋使以来のことで、遣唐使船で渡海した人々も、揚州を離れ次の地に向かうに先立ち、集団で市場にくり出し買い物あさりをする様子が伝えられている[1]のは、今日の日本人の姿の原形を見るようで興味深い。海外の文物への関心は、これに学ぼうとする姿勢において日本人に伝統的であり、今日に続く日本人の特質のようである。しかしこの反面、日本を海外で解るように知らせるとか、日本語を外国語として教える歴史はまだ浅く、ましてや日本文化を海外の相手方の生活文化の中にある周波数に乗せて伝えていく工夫に至っては、一般的にその発想すらないと思われる。

日本語はむずかしいとか、日本のことは外国人には解ってもらえない、との前提を日本側で勝手に作ってしまっていた頃から、私は海外にいてこの方面の問題に関心があった。日本を伝えることのむずかしさは私も考えるが、これを不可能で全く解ってもらえないとまでは考えていない。ただ日本を世界に伝えていくには、できるだけ、その文化発生の根元にまで遡り知っておきたいと思

い、同時に他の国々の文化文明をも併せ学びながら、それらとの比較の中で日本を知りたいと思っていた。そして将来的には日本の側からも世界に対し自らの文化を進んで伝えていくことが必要だ、ということを私はどこかで考えていたのであった。

「国際化」という言葉が使われ出し、その一方で「日本学」への関心を深め始めていた意識の中で、その後、比較思想学会での例会発表の機会が与えられ、私は「国際理解としての日本学の試み」と題し、その学問的な在り方を模索してみたが[2]、この時に抱いた問題意識は今も続いているものである。というのも、外国の方々に日本を説明するに、「日本学」という学的背景を持ちうるなら安心して日本を語ることができると考えていたからであり、私なりにその根拠となるものを求めていたからであった。とは言え文化をその形成の根元にまで遡ることを望んでも、これは不可能に近く、すべては伝承と変化の内に今日に至っているわけで、これは発問それ自体にむずかしさを内包している。

「日本とは何か」を問いつつ「日本学」の在り方をも考えるに、従来の学問の在り方からこれを厳密に問えば、方法論を含めての学問論[3]をクリアしない限り先には進めない。ただ伝統的な学問論も今日ではだいぶ変化してきており、学問成立の根拠も時代と共に変化していく側面もありえよう。しかし私にはビジネス社会にいる現実問題として、学問論を深めていく状況になく、また力もないまま、現実的課題には応えていかねばならなかった。日本人のものの見方、考え方、文化、更には歴史についても、外国の人々を相手に話し伝える必要も生じていたからである。一方その頃になると、産業界の経済活動を通して日本を見る時代の眼にも、海外では厳しいものが生じ始めていた。それは今日にまで続くものだが、Economic Animal から「兎小屋」を経て Workaholic となり、数年前に生じた「特殊論」にまで至ると日本への批判は非難となり、経済戦争は変じて文化戦争に至るかとの雰囲気にまでなって、特に日米間に今なお続く貿易不均衡の問題では、日本人を悪者にせねば気が済まぬとする映画まで作られているとの報道までであった。これが日本を巡る時代の雰囲気だが、私はこの雰囲気というものを非常に深刻に受け止めているもので、一国の内外政策は、全ての国が求めて調和ある時代を作っていかねばならぬところにまで来ているのである。比較思想が経済問題を解決するわけではないが、世界の中で日本が置かれている状況を考える時、これに取り組むための Global Vision 形成の基礎に欠くことのできないものが比較思想的視野の拡がりであろう、と思われる。

(3)

異なる生活文化をもつ人々に向かって日本と日本人を語る必要性は、この学会で約十八年前に「日本学」の発表をした当時に比べ遥かに増大しており、それだけに就学生や留学生、技術研修生といった人たちからの「日本」への質問には、場当たりや思いつ

きで答えてはならないと思う。「国際理解としての日本学の試み」において取り組んだ課題は、私において今、日本文化についての「世界への自己説明の学」[4]となりつつある。

Global な視野に自らを立たせ、日本を考えると同時に世界のことも考えていく。世界の諸文化、諸文明の中で日本文化を捉え、批判的比較の中で自らを語っていく。そういうことが必要な時代に今、私たちは居るのである。そこでは、人間としては己を語り、日本人としては日本文化が語れる、そういうビジネスマンが必要なのであり、それも debate 力をもち外国語によってこれを伝えていくことが必要な時になりつつある。それにはビジネスマン自身がもっと世界の歴史の中で日本について考え、特に自国の文化を外国の人々に正しく説明できるよう、日頃から十分に勉強しておく必要がある。「神道とは何か」と問われて何人のビジネスマンが、あるいは駐在員がこれに正しく応ずるであろうか。日本文化を言語化して理解しておくことはますます大切であろう。

私自身の体験だが、タイで仏教を、アラビアでイスラム教をその地の人に尋ねたとき、ごく普通の人が熱心に答えてくれたものであった。これに比し、日本文化への質問には十分答えぬままでいて、一方、駐在先の生活文化を自分には合わないと嫌ったまま、そこでの生活上の不便さからその国の人々の精神性までも遅れている、と考えるとしたら、それは誤りであろう。しかも、駐在先の文化や歴史に関心も示さぬままビジネスだけは熱心だとしたら、日本人は何処に居ても嫌われてしまうだろう。第一これでは駐在先国の人々に対し失礼である。近代を感じさせない異文化の地で、現代の日本人以上に純粋な信仰を残して祈り暮らす人々の姿に、私は幾度びか感動したことがある。夕陽を前に砂漠で見たアラブ人の祈りがそうであった。もっとも、その純粋性が狂信的信仰に変質し、宗教や民族の対立の激化と混迷につながることは問題である。私はイスラム教を偉大な宗教の一つと思っている一人なので、例えば筑波大学で五十嵐一先生が亡くなられた時は大変なショックであった。それは日本とイスラム世界の双方にとって大きな損失であった。

(4)

異文化の中にも人類に共通の、人間的共感を分かち合える文化価値はあるもので、例えば赤十字活動をイスラムの世界では三日月をシンボルに行っている。日本の「お陰様で」とか「もったいない」という言葉には世界のいかなる文化圏の人々とも共有しうる普遍的価値があり、特に「もったいない」には多くの国の人々がこれを共感的に理解するのを、私は自分の体験でくり返し見てきている。この体験から私はこれを世界語にしていきたいと考え、日本文化を語る折には、Mottainization Movement と称して今も続けているが、このとき私は滴水和尚の水の一滴を大切にする故事を伝え、理解を深めてもらうようにしている。

地球的全体の中で比較思想的立場に立ち、日本の現状を見つめなおし、日本と世界の将来を考えていく比較思想的視野からの日本理解は、その居る場所の内外を問わず日本のビジネスマンの今後に必要だと思う。その意味で日本の現在が、今いかなる時代にあるかを正しく認識しておくことは、将来への日本の進路を誤またぬためにも大切なことである。時の流れはその時代自体がもつ力であり、変えることはできないかもしれないが、これに適切に対応していくことは将来への歴史を担う現代人の責務であろう。

かつて日本が大東亜戦争（一九四一年）に突入した時、これが時代の流れの中でおのおのの国に生じていた世界規模の変動として歴史的にはヴェルサイユ体制（一九一九年）の「ゆらぎ」で生じた歴史的な行き詰まりから、これが植民地主義の崩壊をもたらし、世界に新しい在り方を求めさせているのだ、とする現状認識が歴史学者と哲学者の討議の中で示され、これが開戦翌年の昭和一七年一月号の『中央公論』誌上に「世界的立場と日本」と題し発表されている。[5] しかしこの時の国家指導者には、その後の世界全体をどう造り変えていくべきか、明確な哲学や政策があったわけではない。開戦に当たり、何時、どのようにして戦争を止めるかとの方針もなく、当時の新聞をはじめ国民皆で作り上げた時の流れの勢いに乗って、日本は開戦へと進んでいったのである。やがて戦いに敗れると大東亜戦争は太平洋戦争となり、世界史的には第二次世界大戦の一部を成すものとなり、最近は十五年戦争と呼ばれ、一連の戦争時代の完結として敗戦があったとされるのは、多くの参戦者や国民にとりずっと後のことであった。今ふり返ってこの一連の戦争時代を見るに、満州事変と大東亜戦争の背景は異なっており、これを一連のものとして侵略戦争と断ずるのは誤りである、と私は思っている。

(5)

二十一世紀を前に地球上には人口問題や民族問題から環境問題に至るまで、国境を越えて全人類的に解決すべき問題が生じている。もちろんどの国にも固有の問題があり、すべての国に効く単一の処方箋があるわけではないが、私は人間がもつ可能性として「性善なる本性」を最大限に生かした全体システムの形成に向け、民族や国家の違いを超えての相互理解を深めていくことに最大の努力を払うべき時が現代だ、と考えている。それには、異文化間で単に「知る」だけではなく、相手の立場に立つ共感的理解からの「解る」に至る努力が大切で、相互に相手の価値観や生活文化を大切に仕合う姿勢が必要であろう。そのことに向け互いに努力し合うところに心が生じ、違いも解り合っていく。その理解への基礎づくりは中学校卒業までに完了しておくべきであろう。

単に「理解―知る」だけではない「納得―解る」立場には必ず心の交流が伴うもので、そこには頭だけの理解に止まらない、共感的理解としての心の理解も生じている。その中で日本を知って

もらうとき、「日本人も我々と同じ人間なんだ」という国籍や宗教の違いを超えた、人間としての友情が生じているものである。私はフィリピンでも、サウディアラビアにおいても、そのことを体験しており、現に私には長年の友人であるAhmed Jamjoom[6]という方がジェダにいて、家族同士の付き合いが今も続いており、私はこの方を立派なイスラムとして今も尊敬している。

以上、述べてきたような体験の中で、私は、この比較思想学会に参加できたことを心から感謝している。そして今後も、このような立場から日本文化を語る中で自己を語り、また日本を知ってもらうことに努力を続けていきたいと願っている。国際化よりも地球化と称すべき人類共存のために一体感をもつべきこの時代、様々に展開していくこれからの内外の問題と取り組むに、私たちは地球的全体の視野の中でこれに取り組まねばならぬと思う。そしてこの時、私たちは日本からの文化的貢献という視点も忘れてはならないと思う。しかし同時に、私は不法残留外国人を巡る最近の問題にも、関心を払わずには居られない。この事態に関し行政上の対応がこのままだと、この種の問題に手慣れていない日本には、今後、深刻な問題を残す可能性もある。比較思想がこれに解決をもたらすわけではないが、日本が時代の変化の中で抱える問題の解決に向け道を探るに、その本質に迫ることはできるだろう。このことに関し関係省庁間に一元的な統合調整機能がなく、西欧諸国で起きている現実からの教訓を日本的に生かしていく解決策や方針がないまま、既成事実だけができていく中で、歯車の回転が逆戻りしないrachet effectが日本社会の今後に新たな問題を生みつつあることも指摘されている。[7] 国際理解とは善意だけで全て進められるほど簡単な問題ではない。現実への対応にはThink Globallyの理想と共にAct Locallyの実践もまた必要なのであり、私はこれを私の関係する教育財団での活動にも結びつけ、位置づけて、応分の努力を続けてきたが、今後も与えられた状況の中で理想を見失わず、しかも現実を直視して生きていきたい、と願っている。

(1) 佐伯有清『最後の遣唐使』(講談社) 一二一頁。
円仁『入唐求法巡礼行記』(I) (平凡社) 一二二頁。
(2) 『比較思想研究』第三号、一三二頁。
(3) 峰島旭雄『比較思想をどうとらえるか』(北樹出版)三六・四八頁。
河合栄治郎全集第一七巻『学生に与う』(社会思想社) 七二頁。
清水良衛『日本学のすすめ』(北樹出版) 二九頁。
(4) 清水、前掲書、二三頁。
(5) 『中央公論』(昭和一七年一月号) 一五〇—一九二頁。
(6) 清水、前掲書、一三八頁。
(7) 高尾栄司『安全国家日本の終焉——不法就労外国人の脅威』(光文社) 四一頁。

(しみず・よしえい、日本学、
博報堂秘書役・博報児童教育振興会常務理事)